授業に役立つ自然地理 64

地中海の香りがする!

[一小豆島の地形と産業一]

茨城県立土浦第一高等学校 松本 穂高





図1 小豆島とその周辺図 (二宮書店地図帳紙面を改編)



紺碧の海と輝く太陽,温暖な気候とオリーブ栽培。こんな地中海の風景が,瀬戸内海の小豆島にある。小豆島は、日本でのオリーブ栽培発祥の地として知られ、今も栽培がさかんである(写真1)。小豆島にはなぜ明るい太陽があり、オリーブが栽培されるのか。

1. 小豆島周辺の地形

瀬戸内海は日本の地中海である。地中海といえば、ヨーロッパとアフリカに囲まれた海を誰もが想像するが、本来は大陸に囲まれた海を指す普通名詞である。固有名詞化しているヨーロッパ=アフリカ地中海の他にも、南シナ海、カリブ海、北極海などがある。その用法に倣えば、規模こそ違えど瀬戸内海も本州・四国・九州に囲まれた地中海といえる。

日本の地中海は、本家ヨーロッパの地中海と同様に、火山活動でできた地形が目を引く。讃岐平野には溶岩台地の屋島(写真2)や、マグマの貫入体でできた飯野山(写真3)、讃岐富士)がある。屋島は湖底で噴出した安山岩質溶岩がキャップロックになってできたメサであり、飯野山は溶岩の侵食が進んでできたビュートである。キャップロックとは、侵食への抵抗性が強く、それが地表にあるために下層を侵食から守るはたらきをする硬岩層のことである。その硬岩層がテーブル状の高まりをつくっているものをメサ、侵食が進んで塔状になったものをビュートとよぶ。

小豆島の地形も、このキャップロックがつくるメサが基本となっている。侵食が進み、寒霞渓などの渓谷も発達す



写真2 溶岩台地の屋島(2019年) 溶岩がキャップロックとなっているメサの地形である。メサは他にも小豆島や豊富など、周辺に多くある。

るが、島の中心部には標高800 m前後の山頂平坦面が広がる。この平坦面は新第三紀にあたる1300万~1500万年前に噴出した溶岩や凝灰岩であり、瀬戸内火山岩類とよばれる。この瀬戸内火山岩類は、その下にある花崗岩を突き破って噴出したもので、その花崗岩は中生代白亜紀にあたる8000万~9000万年前にできたものである。つまり小豆島は、古い花崗岩の上を新しい溶岩が覆う、二重構造になっている。

この一段目をつくる花崗岩は、風化するとマサ土となって侵食されやすい特徴がある。侵食されやすいので、斜面の傾斜は緩くなる。この緩斜面が広がることが、小豆島に暮らす人々の生活に重要な役割を果たした。



写真 3 飯野山 (2019年) 讃岐富士ともよばれる。マグマの貫入岩体が侵食から取り残されてできたビュート地形である。



写真4 小豆島の醤油蔵 (2019年) 最盛期の 400 軒から大きく減少したが、今も 20 軒余りが醤油や佃煮を生産している。オリーブ油生産に移行した蔵もある。

2. 島の生活を一変させたもの

小豆島は、先進の島である。400年前の江戸時代、瀬戸内地域で他に先駆けて醬油作りが始まった。醬油は、大阪城の石垣に使う石を切り出す労働者が持ち込んだもので、これに興味をもった小豆島の人々が作り始めたのである。乾燥した気候は塩田から採る塩を良質なものにし、温暖な気候は麹の発酵に適した。大消費地の大阪に近く、海運上の立地にも恵まれた。明治の最盛期には400軒の醬油蔵がひしめく、一大産地となった(写真4)。

明治の後年になると、ほかの産地におされて醤油生産は 下火になり、島の経済は苦境に陥った。それを救ったのが オリーブである。

オリーブは、魚を油漬けの缶詰にする際の油糧として、1908年に小豆島で試験栽培が始まった。ほかの試験地だった三重県と鹿児島県では実が付かず失敗したのに対し、小豆島のオリーブは見事に結実した。これは、まさに瀬戸内の少雨で温暖な気候の恩恵である。

要因はそれだけではない。花崗岩の侵食でできた緩斜面は、島の南岸地域に日当たりのいい南向き斜面をもたらした。マサ土は水はけがよく、オリーブ栽培には絶好の地だった。 さらに、衰退した醤油作りの代替産業を求める人々がいた。醤油蔵の設備をオリーブオイルの搾油に転用するこ





写真6 満濃池 (2019年) 灌漑用ため池として日本最大の貯水量がある。空海が造ったともいわれ、水利が乏しい讃岐平野で安定した農業を可能にした。

ともできた。搾油に、醤油もろみの圧搾方法が援用できたのである。このような工夫で、小豆島のオリーブオイル作りは島の産業として根付いていった(**写真5**)。

3. オリーブ産業で展望できること

島の人々の生活は、オリーブ栽培で大きく変わった。もともと降水が少なく、山がちなので、稲作もままならない。瀬戸内でよく見られるため池(写真6)を作るにも、地形が険しすぎて難があった。小説『二十四の瞳』の舞台といわれる小学校がある岬は、今でこそ細い車道が通じているものの、島内の町から渡し船も出ているほどの辺境に変わりはない。

このような地も抱えながら、島はいまオリーブ栽培で活気づいている。昨今の健康食品ブームで国産品が見直され、需要が高まった。オリーブオイルを配合した化粧品のほか、葉を使った茶や、果実をエサにしたオリーブ牛などが特産品となっている。

西ヨーロッパ諸国と比べて経済発展が遅れた地中海沿岸 地域は今,低賃金労働力による産業立地と,陽光を生かし た観光地化が進む。日本の地中海に浮かぶ小豆島も,島民 が時代に合わせて柔軟に変化し続けてきたことが,今の隆 盛をもたらした。不利な条件にある離島でも行く先が展望 できることを示す,まさに明るい太陽のような島である。